添　付

2020/21 競技規則　変更と明確化（ならびに VAR の手順、用語集および審判員のための実践的ガイドラインへの変更）

2020 年 4 月

【競技規則変更の概要】

第 1 条 ― 競技のフィールド

- ゴールポストとクロスバーは、4 つの基本的な形状（正方形、長方形、円形、楕円形）の組み合わせでも良い。

第 10 条 ― 試合結果の決定

- 警告や注意は、ペナルティーマークからのキック(KFPM)に繰り越されない。
- KFPM に関する第 14 条の変更も参照のこと。

第 11 条 ― オフサイド

- 守備側競技者による意図的なハンドの反則は、オフサイドの判定において「意図的なプレー」として考える。

第 12 条 ― ファウルと不正行為

- ハンドの反則
  - 肩と腕の境界は、脇の下の最も奥の位置であると定めた（この「2020/21 競技規則変更と明確化」の最終ページに示される図を参照のこと）。
  - 攻撃側競技者（あるいは、その味方競技者）による「偶発的なハンドの反則」は、得点か明白な得点の機会となる「直前」のものだけが罰せられる。
- ゴールキーパーは、手や腕であっても、（ゴールキックやフリーキックなどで）プレーの再開後に「不正に」ボールを２度触りした場合、警告されたり、退場を命じられることがある。
- 「大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止する」すべての反則に対して警告される。
- ドロップボールが行われるとき、規定の４ｍを離れない競技者は警告されなければならない。
- 主審が「大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止する」反則にアドバンテージを適用した場合や「すばやい」フリーキックを認めた場合、警告されない。

第 14 条 ― ペナルティーキック

- ゴールキーパーの反則（飛び出し）は、けったボールがゴールを外れたり、（ゴールキーパーがボールに触れることなく）ゴールから跳ね返ったならば、明らかにキッカーに影響を及ぼしていない限り、これに対して罰則を与えない。
- ゴールキーパーの最初の反則（飛び出し）には注意を与えられ、以降の反則には警告される。
- ゴールキーパーとキッカーが全く同時に反則を犯した場合、キッカーが罰せられる。

VAR の手順

● VAR オンリーレビューには、「TV シグナル」を１度だけ示せばよい。

用語集

● 相手を押さえる（ホールディング）の定義を付け加えた。
● プレーを再開するときの競技者の位置は、競技者の足または体のいかなる部分のグラウンドについている、その位置によって判断されることとした（第 11 条－オフサイドに示される場合を除く）。

明確化

ゴールキックやフリーキックのときに、ゴールキーパーが「フリック（足で持ち上げ）」したボールをゴールキーパーが手で扱えるよう、味方競技者が頭か胸でゴールキーパーに戻した場合、ゴールキックは再び行われるが、懲戒の罰則は与えられない（何度も行わない限り）。

再構成した文章

第 12 条 ー ファウルと不正行為

● ハンドの反則の定義に関する黒丸の文章の順番を変更した。

第 14 条 ー ペナルティーキック

ゴールキーパーの反則に関する黒丸の文章を付け加えた。

● ペナルティーキックの反則に関する要約表を最新のものとし、再構成した。

VAR の手順

● 「レビュー」の項の文章を変更し、多くのVARレビューが「オンフィールドレビュー（OFR）」になることを強調した。

【競技規則変更の詳細】

下記は、2020/21版競技規則のための変更である。それぞれの変更について、新しい文章、改正されたまたは追加の文章には、必要に応じこれまでの文章、そして変更理由を記している。

・ 削除された文章＝ ~~サッカー~~
・ 新しい文章＝サッカー

第１条 ー 競技のフィールド

10. ゴール

改正された文章

(…)

ゴールポストとクロスバーは、承認された材質でできていなければならない。その形は正方形、長方形、円形、~~または、~~楕円形、またはこれらの組み合わせのいずれかでなければならず、危険なものであってはならない。

解説

ゴールポストとクロスバーの形状は、4つの基本的な形状の組み合わせでも良い。

第2条 ー ボール
2. 欠陥が生じたボールの交換
改正された文章

ボールに欠陥が生じた場合：
- プレーは、停止される。
- プレーは、ドロップボールで~~もとのボールに欠陥が生じた場所で、交換したボールをドロップして~~再開される。

解説
第8条の文章と一貫性を保つための変更

第4条 ー 競技者の用具
4. その他の用具 – 電子的パフォーマンス・トラッキングシステム（EPTS）

改正された文章

FIFA、大陸連盟または各国サッカー協会の主催下で行われる公式競技会の試合で、電子的パフォーマンス・トラッキングシステム（EPTS）のひとつとしてウェアラブル技術（WT）が用いられる場合、競技会主催者は、競技者が着用する機器が危険でないものであり、IMS(国際試合標準)かFIFA品質基準のいずれかに適合した~~以下のマークが付いた~~ものとさせなければならない：

（このマークは削除される）

~~このマークは、公式にテストされ、FIFAが作成しIFABが承認した国際試合基準が求める最低限の安全条件を満たしていることを示す。~~テストを行う検査機関は FIFA によって承認される必要がある。
電子的パフォーマンス・トラッキングシステム（EPTS）が試合や大会の主催者によって提供される場合、試合や大会の主催者は、~~が用いられる場合（各国サッカー協会や競技会主催者の合意を前提として）、競技会主催者は、~~公式競技会で行われる試合において、試合中、EPTSからの情報およびデータが確実かつ的確にテクニカルエリアに送られるようにしなければならない。
(…)
次のマークは、(ウェアラブル、または光学式)EPTS~~の機器およびシステム~~がサッカーの試合における的確かつ確実な位置データに関する要件~~を満たしていることを示している正式に~~のテストが行われたことを示している。

解説
EPTS 装置に関するFIFA 品質基準の変更に合わせ、文章を変更した。

第 10 条 ー 試合結果の決定
３．ペナルティーマークからのキック
改正された文章
試合後にペナルティーマークからのキックが行われるときも、他に規定されていない限り、競技規則の関係諸条項が適用される。試合中に退場を命じられた競技者のキックへの参加は認められないが、試合中に示された注意や警告はキックに繰り越されない。

解説
ペナルティーマークからのキック（KFPM）は試合の一部ではないので、（延長戦を含む）試合中に示された警告や注意はKFPMに繰り越されない。試合中およびKFPMに１度ずつ警告を受けた競技者は退場を命じられない（KFPM中にも退場とならないし、1試合における2つ目の警告としてカウントされず、次の試合の自動的な出場停止にはならない）。

＜日本協会の解説＞
ペナルティーマークからのキック（PK戦）は、試合の一部ではなく、試合またはホームアンドアウェーの対戦が終了し、競技会規定として勝者を決定する必要がある場合に取られる「試合とは別個に設定された進め方」であることから、競技者のみならず、交代要員、交代して退いた競技者あるいはチーム役員が試合中に受けた注意、警告は、PK 戦に繰り越されないとされた。

例えば、ゴールキーパーが試合中のペナルティーキックでボールがけられる前に飛び出した場合、最初の飛び出しには注意となるが、これもPK戦には繰り越されないので、PK戦で新たに飛び出した場合も警告ではなく、注意となる（2度目以降は警告）。また、試合中に警告を受けた競技者がPK戦で不正なフェイントにより警告されても、あくまでも新たな警告であり2回目の警告として退場は命じられないので、次の試合の自動的な出場停止にはならない。

もっとも、競技会で導入されている警告の累積については、原則それぞれの規律委員会等で決定されるものの、示されたすべての警告がその対象になると考えられる。

３．ペナルティーマークからのキック
改正された文章
ペナルティーマークからのキックの進行中
（…）

● ゴールキーパーが反則を犯し、その結果キックを再び行うことになった場合、１度目の反則であったなら、ゴールキーパーは~~警告されなければならない、~~注意され、その後も反則を犯したならば、警告される。

(…)

● ゴールキーパーとキッカーの両方が同時に反則を犯した場合、キックは失敗として記録され、キッカーは警告される。

~~▪ キックが失敗した、あるいは、セーブされた場合、そのキックはやり直しとなり、両方の競技者は、警告される。~~

~~▪ ボールがゴールに入った場合、得点は認められず、そのキックは失敗として記録され、キッカーは警告される。~~

解説

● ゴールキーパーは多くの場合、ボールがけられるタイミングの予測に失敗して飛び出した結果、反則を犯していることから、最初の反則には注意とする。しかし、再び行ったキックやそれ以降のキックでの反則には警告されなければならない。

● （あまり発生しないことだが）ゴールキーパーとキッカーがまったく同時に反則を犯した場合、ゴールキーパーは「不正な」フェイントによって飛び出しをしてしまったことになるので、キッカーが罰せられなければならない。

第 11 条 ― オフサイド

２．オフサイドの反則

改正された文章

オフサイドポジションにいる競技者は、相手競技者が意図的にプレーしたボールを受けたとき、意図的なハンドの反則を犯した場合も含め、~~（相手競技者が意図的にセーブした場合を除いて）~~、利益を得ているとはみなされない。ただし、意図的なセーブからのボールを除く。

解説

守備側競技者の意図的なハンドがあり、その後にボールがオフサイドポジションの攻撃側競技者に渡っても、オフサイドの反則にはならないことを明確化した。守備側競技者が「正当に」意図的なプレー（ボールをける、ヘディングするなど）をした後、ボールがオフサイドポジションの攻撃側競技者に渡ってもオフサイドの反則とはならない。同様に、守備側競技者の「不正な」プレー（例えば「意図的なハンド」）からボールが渡ってもオフサイドの反則にはならない。

＜日本協会の解説＞
ハンドの反則が犯されると、多くの場合プレーが停止され、攻撃側チームに直接フリーキック（またはペナルティーキック）が与えられることになるが、まれに、守備側競技者からのボールがオフサイドポジションにいた攻撃側競技者にわたり、攻撃のチャンスにつながることがある。この場合でも、守備側競技者による意図的なプレー後に受け取ったボールと同様、この攻撃側競技者はオフサイドの反則を犯しているとはみなされず、もしハンドの反則にアドバンテージが適用されたならば、攻撃側競技者はそのままプレーを続けることも可能となる。

第 12 条 ― ファウルと不正行為

１．直接フリーキック　―　ボールを手または腕で扱う

新しい文章と図

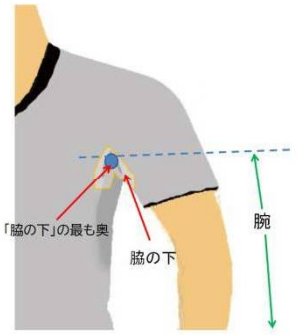
ハンドの反則を判定するにあたり、腕の上限は脇の下の最も奥の位置までのところとする。

解説

ハンドの反則を判定するにあたり、この「2020/21 競技規則　変更と明確化」の最終ページにある図に示されるように、腕は、「脇の下」の最も奥の位置から下の部分とした。

＜日本協会の解説＞

ハンドの反則かどうかを判断するにあたり、下図に示されるよう、「腕」は脇の下の範囲の一番奥の場所までと定義づけられた（手を下げた場合、脇の下の最も上に位置するところまで）。これにより、この位置を境界（競技規則においては、第 12 条に図として示される）として、「腕」の部分にボールの一部が触れた場合、ハンドの反則となるかどうかについて判断されることになる。



１．直接フリーキック ― ボールを手または腕で扱う

改正された文章

競技者が次のことを行った場合、反則となる。

- 手や腕をボールの方向に動かす場合を含め、手や腕を用いて意図的にボールに触れる。
- ゴールキーパーを含め、偶発的であっても、手や腕から相手チームのゴールに直接得点する。
- 偶発的であっても、ボールが自分や味方競技者の手や腕に触れた直後に~~ボールを保持して、またはコントロールして、次のことを行う。~~
  - 相手競技者のゴールに得点する。
  - 得点の機会を作り出す。

~~競技者が次のことを行った場合、通常は反則となる。~~

- 次のように手や腕でボールに触れたとき
  - (…)

これらの反則を除き、次のようにボールが競技者の手や腕に触れた場合は、~~通常は~~反則ではない：

(…)

解説

ハンドの反則の解釈について、次のとおり明確化した:

- ボールが偶発的に攻撃側競技者の手や腕に触れた後、ボールが他の攻撃側競技者にわたり、直後に攻撃側チームが得点をした場合は、ハンドの反則となる。
- ボールが偶発的に攻撃側競技者の手や腕に触れ、得点や得点の機会を得る前に、（パスやドリブルで）ボールがある程度の距離を移動した場合、またはいくつかのパスが交換された場合は、反則とならない。

１．直接フリーキック ― ボールを手または腕で扱う

改正された文章

ゴールキーパーは、自分のペナルティーエリア外でボールを手または腕で扱うことについて、他の競技者と同様に制限される。ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、認められていないにもかかわらず手や腕でボールを扱った場合、間接フリーキックが与えられるが懲戒の罰則にはならない。しかしながら、プレーが再開された後、他の競技者が触れる前にゴールキーパーが再びボールを触れる反則の場合（手や腕による、よらないにかかわらず）、相手の大きなチャンスとなる攻撃を阻止した、または相手の得点や決定的な得点の機会を阻止したのであれば、懲戒の罰則となる。

解説

プレーが再開された後、ゴールキーパーが相手の大きなチャンスとなる攻撃を妨害したり、得点の機会を得るのを阻止するために意図的に（他の競技者がボールに触れる前に）再びボールに触れたならば、ゴールキーパーは警告か退場を命じられるべきである。再び手や腕でボールに触れたとしても、「ハンドの反則」ではなく、「不正に」ボールを再びプレーしたという考え方が適用されるためである。

３．懲戒処置 ― カードを示すためにプレーの再開を遅らせる

改正された文章

主審が警告または退場と判断した場合、懲戒の罰則の処置をし終えるまでプレーを再開させてはならない。ただし、主審が懲戒の罰則の手続きを始めておらず、反則を犯していないチームがすばやくフリーキックを行って、明らかな得点の機会を得た場合を除く。懲戒の罰則の処置は、次にプレーが停止されたときに行われる。なお、反則が相手チームの決定的な得点の機会を阻止したものであった場合、競技者は警告されることになり、相手の大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止したものであった場合、競技者は警告されない。

解説

DOGSO（決定的な得点の機会の阻止）の反則があった後に主審が「すばやい」フリーキックを認めた場合、次にボールがアウトオブプレーになった後、退場は命じられず警告となる。この考えとの一貫性を保つため、大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止した反則があった後に主審が「すばやい」フリーキックを認めたならば警告とすべきではない。

３．懲戒処置 ― アドバンテージ

改正された文章

警告や退場となるべき反則に対して、主審がアドバンテージを適用したとき、この警告や退場処置は、次にボールがアウトオブプレーになったときに行われなければならない。しかしながら、反則が相手チームの決定的得点の機会を阻止するものであった場合~~を除き~~、競技者は反スポーツ的行為で警告され、反則が大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止したものであった場合は警告されない。

解説
主審が DOGSO（決定的な得点の機会の阻止）の反則にアドバンテージを適用した場合、退場から警告となることから、これと整合性を取るため、大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止した反則にアドバンテージを適用した場合、警告とすべきではない。

３．懲戒処置 ― 警告となる反則
改正された文章
競技者は、次の場合警告される：
(…)
● ドロップボール、コーナーキック、フリーキック、またはスローインでプレーが再開されるときに規定の距離を守らない

解説
「規定の距離を離れない」警告の反則の１項目にドロップボールを加える。

３．懲戒処置 ― 反スポーツ的行為に対する警告
改正された文章
競技者が反スポーツ的行為で警告されなければならない状況は様々である。例えば：
(…)
● 相手の大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止するために~~ファウル~~いかなる反則を犯す。ただし、ボールをプレーしようと試みて反則を犯し、主審がペナルティーキックを与えた場合を除く。

解説
相手の大きなチャンスとなる攻撃は、ファウルとなるチャレンジではない方法で妨害、または阻止されることがあることから（例えば、プレー再開後「不正に」ボールを再びプレーする）、前項（黒丸の文章）で規定している「ハンドの反則」以外、該当するすべての反則に対して警告できるようにした。

第 14 条 ― ペナルティーキック
2. 反則と罰則
改正された文章
(…)
ボールがインプレーになる前に、次のいずれかが起きた場合：
(…)
● ゴールキーパーが反則を犯し：
- ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
- ゴールキーパーの反則が明らかにキッカーに影響を与え、ボールがゴールに入らなかった、またはクロスバーやゴールポストから跳ね返った場合、キックが再び行われるだけとなる。

- ボールがゴールキーパーによりゴールに入るのを阻止された場合、キックは再び行われる。

ゴールキーパーが反則を犯した結果キックが再び行われた場合、その試合において最初の反則については注意が与えられ、それ以降の反則には警告が与えられる。

- ~~ゴールキーパーまたは~~ゴールキーパーの~~その~~味方競技者が反則し：
  - ボールがゴールに入った場合、得点が認められる。
  - ボールがゴールに入らなかった場合、キックは再び行われる。~~ゴールキーパーが反則を犯した場合は警告される~~
- 競技者がより重大な反則（例えば不正なフェイント）を犯した場合を除き、両チームの競技者が反則を犯した場合、キックは再び行われる。
- ゴールキーパーと キッカーが同時に反則を犯した場合、
  - ~~ボールがゴールに入らなかった場合、キックをやり直し、両方の競技者は警告される。~~
  - ~~ボールがゴールに入った場合、得点は認められず、~~キッカーは警告され、守備側チームの間接フリーキックでプレーを再開する。

解説

- （2019 年 8 月：回状 17 号で概要を説明してあるが）ペナルティキーキックが行わるときにゴールキーパーが反則を犯したものの、（例えば、ゴールキーパーが「セーブ」をすることなく）ボールがゴールを外れたり、ゴールポストやクロスバーから跳ね返ってきた場合、明らかにゴールキーパーの動きがキッカーに影響を与えていないのであれば、ゴールキーパーが罰せられることはないことを確認する。
- ゴールキーパーは多くの場合、ボールがけられるタイミングの予測に失敗した結果、飛び出しの反則を犯してしまっているので、最初の飛び出しの反則には警告しない。2 度目以降の飛び出しや試合中で次以降のペナルティーキックでの飛び出しは、警告されなければならない。
- （あまり発生はしないが）ゴールキーパーとキッカーが全く同時に反則を犯したとき、ゴールキーパーはキックの瞬間を予測して動き、「不正な」フェイントによって飛び出してしまったので、キッカーが罰せられることになる。

３．要約表
改正された表

ペナルティーキックの結果		
	ゴール	ノーゴール
攻撃側競技者 による侵入	ペナルティーキックを再び行う	間接フリーキック
守備側競技者 による侵入	ゴール	ペナルティーキックを再び行う
守備側競技者および攻撃側競技者による侵入	ペナルティーキックを再び行う	ペナルティーキックを再び行う
ゴールキーパー による反則	ゴール	セーブされない：ペナルティーキックを再び行われない （キッカーが影響を受けていない限り） セーブされる：ペナルティーキックを再び行い、ゴールキーパーに注意、以降の反則には警告
ゴールキーパー およびキッカーが 同時に反則	間接フリーキック ＋キッカーに警告	間接フリーキック ＋キッカーに警告
ボールが後方に けられた	間接フリーキック	間接フリーキック
不正なフェイント	間接フリーキック ＋キッカーに警告	間接フリーキック ＋キッカーに警告
特定されていない キッカー	間接フリーキック ＋特定されていないキッカーに警告	間接フリーキック ＋特定されていないキッカーに警告

VAR 手順とハンドブックのアップデート
４．進め方 ー チェック
改正された文章

● 「チェック」によって「はっきりとした、明白な間違い」または「見逃された重大な事象」の可能性が示された場合、VAR はこの情報を主審に伝え~~（どのような判定を下すべきかは伝えない）~~、主審は「レビュー」を開始するかどうかを決定する。

解説
判定について、VAR は主審に助言することを認められているが、「最終の判定は常に主審が行う」と明確に規定されているので、「どのような判定を下すべきは伝えない」と記述することは不要であることから、この文章を削除した。

４．進め方 ー レビュー

改正された文章

- プレーがまだ停止していなければ、その後ボールが（通常、どちらのチームも攻撃の動きをしていない）中立な地域に移動する、または中立な状況になったら、主審がプレーを停止し、「TV シグナル」を示す。
- ~~どちらの状況においても、主審は TV シグナルを明確に示す（テレビモニターの形を見せる）ことで、「レビュー」することを示さなければならない。~~
- VAR は、リプレー映像に何が映っているかを主審に説明する。~~が、どういう判定を下すべきかは伝えない。~~主審は：
  - （既に示されていなければ）「TVシグナル」を示し、最終の判定を下す前にレフェリーレビューエリアへ行き、リプレー映像を**見**る（「オンフィールドレビュー（OFR）」という）。他の審判員は、特別な状況下で、主審からの要請がない限り、映像のレビューを行わない。

  または、
  - 主審自身の見方およびVARからの情報、また、必要に応じてその他の審判員の意見に基づき、最終の判定を下す（「VARオンリーレビュー」という）
- どちらのレビュープロセスにおいても、最後に主審は~~再び~~「TV シグナル」を示し、その直後に最終の判定を下さなければならない。
- 反則の強さ、オフサイドによる妨害、ボールを手または腕で扱う反則に関して考慮すべきことといった主観的な判断に基づく判定を下す場合は、~~概ね~~「オンフィールドレビュー（OFR）」が適切である。
- 反則のあった位置または競技者のいた位置（オフサイド）、コンタクトポイント（ボールを手または腕で扱う反則またはファウル）、場所（ペナルティーエリアの内側または外側）、ボールアウトオブプレーなど、事実に基づく決定をする場合、通常、「VAR オンリーレビュー」で行うことが適切である。しかし、競技者や試合のコントロールや、その決定が「周囲を納得させる」のに役立つのであれば、事実に基づく決定をする際にも「オンフィールドレビュー（OFR）」を行うことができる（試合終盤における、試合を決定づける重要な判定など）。

解説

- 「VAR オンリーレビュー」のためには、「TV シグナル」を１度示すだけで十分である（プレーを止めた後にシグナルを示すことが必要な場合を除く）。
- 主観的な判断が必要な事象や判定には「オンフィールドレビュー（OFR）」が求められていることを強調するために文章の順番を変えた。

用語集への変更

新しい文章

相手を押さえる反則（ホールディング）

相手を押さえる反則（ホールディング）は、競技者が相手競技者の身体または用具に接触して相手競技者の進行を妨げるときのみに起こる。

プレーを再開するときの（競技者の）位置
プレーを再開するときの競技者の位置は、第11条に説明されている場合を除き、競技者の足または体のいかなる部分のグラウンドについている、その位置によって判断される。

審判員のための実践的ガイドラインの変更
ペナルティーキック（p.212）

改正された文章

ボールがけられる前にゴールキーパーが露骨にゴールラインから離れて~~得点とならなかった~~得点を阻止した場合、副審は旗~~を上げなければならない~~、試合前の主審との打ち合わせに基づき、飛び出しについて知らせなければならない。

５．負傷対応　(p222)

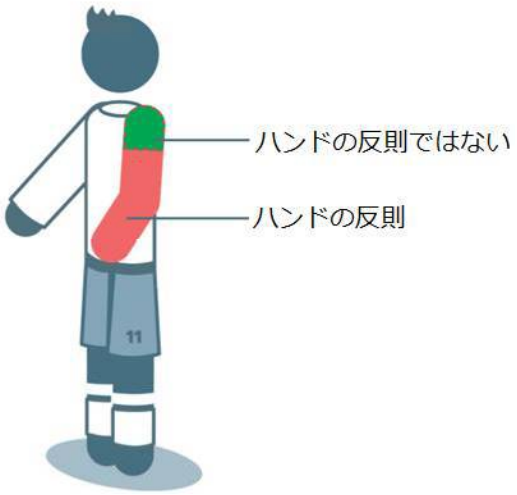
項目および文章の追加

競技者の安全確保は最も重要であり、主審は、特に重傷や頭部の負傷の判断において、医療関係者が容易に負傷者に対応できるようしなければならない。これには、関係者の合意を得た負傷の判断、または処置の手順に基づき、援助していくことも含まれる。

~~５~~６．　警告または退場を伴う反則後の治療と負傷の判断（p.222）
項目の番号と文章の変更

（…）
一般的なガイドラインとして、重傷や頭部の負傷の程度の判断を除き、誰もがプレーの再開の用意ができたときから（…）　。

ハンドの反則の図



JFA

日サ協発第 200060 号
2020 年 5 月 14 日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会（以下、IFAB）から 2020 年 5 月 8 日付回状第 19 号をもって「2019/20 および 2020/21 競技規則－第 3 条への暫定的改正」について通達がありました。通達自体の日本語訳は、下記のとおりです。
今回の通達は、世界中における新型コロナウイルスの感染拡大により、各国のサッカー競技会が中断、また開幕できない状況を余儀なくされている中、競技会の開幕および再開後、限られた期間で試合に臨むことになる選手の安全および適切な環境を確保するために、2020 年内に終了予定の競技会における交代の最大数について暫定的に改正したものであり、競技会主催者の判断によって適用することができます。

本通達について、各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるようお願いいたします。

記

第 3 条への暫定的改正について

COVID-19 のパンデミックは、スポ―ツを含め世界中で日常生活に広範囲にわたる影響を及ぼした。多くの国がこの状況から抜け出し始め、ウイルスの影響を被ったサッカー競技会の再開に対して、徐々に焦点が向けられてきている。競技会が再開されるとき、試合は（例えば、次のシーズンへの影響を小さくするため）、期間を凝縮して、また、異なる気象の状況下で行われることもあり、これらは、選手の快適な環境確保に影響を及ぼすことになり得る。

これにより、国際サッカー評議会（IFAB）は、既に開始されているいないにかかわらず、**2020 年内に終了予定**の競技会における交代の最大数に関する**競技規則第 3 条―競技者への暫定的改正導入**（詳細については、3ページを参照）に対する FIFA の要望を承認した。

この暫定改正を適用するかどうかについては、競技会の主催者の判断に委ねられる。IFAB と FIFA は、例えば、2021 年に完了することになる競技会について、延長して適用する必要があるかどうか、今後決定する。

第 3 条―競技者　ー　暫定的改正

競技規則の文章は、この回状の3ページに示してあるが、概略は次のとおり。

公益財団法人 日本サッカー協会
〒113-8311 東京都文京区サッカー通り（本郷 3-10-15）JFA ハウス
Tel.050-2018-1990 Fax.03-3830-2005
www.jfa.jp

- 各チームは最大 5 人の交代要員を用いることができる。
- 試合が途切れる回数を減らすため、試合中の交代は各チーム最大 3 回とする。加えて、ハーフタイム時にも交代することができる。
- 両チームが同時に交代した場合は、各チームそれぞれ 3 回のうちの 1 回の交代回数を使ったとして数える。
- 試合中に使わなかった交代、また、残りの交代回数は延長戦に繰り越す。
- 競技会規定で、延長戦にさらに1人の交代要員の追加を認めているのであれば、各チームはもう 1 回の交代を行うことができる。加えて、交代は延長戦の始まる前、また延長戦のハーフタイムにおいても可能である。

（注）再交代の使用は、（現在、最大 3 人の交代が認められている）上位の競技会において用いることはない。

IFAB はこの機会に、大会主催者が、第 7 条に規定する飲水タイムやクーリングブレークなど、競技規則にある選手やその他の試合の参加者の快適な環境確保や安全に関する対応策について目を向けていただきたいと考える。

ビデオアシスタントレフェリー（VAR）が導入されている競技会は、競技会再開時に主催者の判断において、使用を中止することが認められる。しかしながら、VAR が使用されるならば、競技規則のすべての観点、更には、VAR の手順が、そのまま適用されることになる。なお、競技会は IFAB の承認なく、第 3 条の暫定的改正の適用、また、現在使用可能な対応を行うことができる。

コロナウイルス（COVID-19）と 2020/21 競技規則

2020/21 競技規則は、競技会（および競技会以外の試合）において、2020 年 6 月 1 日に施行されることになるが、COVID-19 によって中断されている競技会については、再開が 2020 年 6 月 1 日以降であっても、2019/20 競技規則を用いるのか 2020/21 競技規則で競技会を終了させるのか選択することができる。競技会再開に備えて行う「親善、準備、または練習」試合については、競技会が再開するときに適用される競技規則を用いるべきである。

国際サッカー評議会
専務総長　ルーカス・ブラッド

第 3 条—競技者:交代の数

現在の文章:

2. 交代の数
公式競技会
交代要員の数は、公式競技会のいかなる試合でも最大で 5 人までとし、その数は FIFA、大陸連盟、または、各国サッカー協会が決定する。ただし、トップディビジョンにおけるクラブのトップチーム、あるいは各国の「A」代表チームが出場する男子および女子の競技会では、交代は最大で 3 人までとする。

暫定的な改正:

競技会の主催者は、次のいずれか、または、両方を適用することができる:

- *試合中、各チームは:*
  - *最大 5 人の交代要員を用いることができる。*
  - *最大 3 回の交代を行うことができる。(*)*
  - *加えて、ハーフタイムにも交代を行うことができる。*

- *延長戦が行われるとき、各チームは:*
  - *加えて、さらに 1 人の交代要員を用いることができる(各チーム、既に最大数の交代要員を用いている、いないにかかわらず)。*
  - *加えて、さらに 1 回の交代を行うことができる(既に最大の交代回数を用いている、いないかかわらず)。(*)*
  - *加えて、次の交代を行うことができる。*
    - *延長戦が始まる前*
    - *延長戦のハーフタイム*

チームが最大の交代要員、交代の回数を用いていないのであれば、試合中に用いなかった交代要員、また、交代回数は延長戦に繰り越すことができる。

(*) 両チーム同時に交代を行ったならば、各チーム 1 回の交代の回数を用いたとして数えることになる。

JFA

日サ協発第 200057 号
2020 年 5 月 14 日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会（以下、IFAB）から 2020 年 4 月 7 日付回状第 18 号をもって 2020/21 年の競技規則改正を含む、IFAB 第 134 回年次総会における決定について通達されました。

通達自体の日本語訳（概略）は、下記のとおりです。昨年（2019/20）の改正では競技に直結する規則の改正が数多くありましたが、本年の改正はこの数年の改正の中では最も少なくなっています。しかしながら、これまでどおり、サッカー競技にかかわる関係者、特に競技者、監督/コーチそして審判員はこれらの改正を十分に理解した上で、プレー、指導、そしてレフェリングに携わっていただきたく、お願い申し上げます。

IFAB からの回状に添付されている「2020/21 年競技規則ー変更と明確化」は、必要に応じ「日本協会の解説」を加えたものを本通達に添付しています。各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるよう、併せてお願い申し上げます。

これらの改正等は国際的には原則 2020 年 6 月 1 日から有効となります。例年日本サッカー協会では、この通達とともに各種競技会における競技規則改正の適用開始日を通知していましたが、昨今の新型コロナウィルス感染拡大に伴い、各種競技会および試合が延期・中止となっている状況であるため、適用開始日については、日程が確定した時点でお知らせいたします。

なお、今回の競技規則の改正についての説明用映像を本協会のホームページに 6 月初旬までに掲載する予定です。

記

国際サッカー評議会（IFAB）第 134 回年次総会について（決定）

IFAB の第 134 回年次総会は 2020 年 2 月 29 日に北アイルランドのベルファストにおいて、デイビッド・マーチン アイルランドサッカー協会会長が議長となり、開催された。年次総会における主たる決定および議論の概要は、次のとおり。

1. 2019/20 競技規則

昨年（2019/21）の競技規則改正は、満足のいくものであったと評価された。特に、ゴールキック、交代の進め方、チーム役員へのレッドカードやイエローカードの提示、攻撃側競技者が守備のための壁に入ることが出来なくなったことは、すべてのレベルの試合において好影響を与えた。

2. 2020/21 競技規則

公益財団法人 日本サッカー協会
〒113-8311 東京都文京区サッカー通り（本郷 3-10-15）JFA ハウス
Tel.050-2018-1990 Fax.03-3830-2005
www.jfa.jp

いくつかの競技規則改正が承認されたが、文章そのものは、前述のとおり、添付の「2020/21 年競技規則—変更と明確化」で示されている。

なお、6 月 1 日以降、変更点のすべてが競技会および試合において施行されなければならないが、この日以前に開始されている競技会については、事前に施行することも次の競技会が始まるまで遅らせることもできる。

コロナウィルス（COVID-19）と競技規則

CODIV-19 によって中断されている競技会については、競技会の最後の試合まで 2019/20 競技規則を用いるのか 2020/21 競技規則を採用するのか選択することができる。

＊ 親善試合、練習試合あるいは競技会再開準備のための試合については、競技会再開が 2020 年 6 月以降であっても、その時に適用されることになっていた競技規則を用いることが可能である。

主な変更

年次総会で承認された競技規則の主な変更や明確化

- ハンドの反則：
  - 偶発的にボールが攻撃側競技者の腕や手に当たった場合、当たった「直後」に得点、また、その競技者やチームが決定的な得点をする機会を得た場合のみ罰せられることになる（例えば、ボールが手や腕に当たった後、ボールがほんの短い距離しか移動しなかったり、数少ないパスしか行われなかった場合など）。
  - ハンドの反則になるかどうかの判断をするために、「腕」は脇の下の一番奥の場所の位置までと定義することとした。
- ペナルティーキックおよびペナルティーマークからのキック（KFPM）
  - ボールがけられる前にゴールキーパーが飛び出したが、ボールがゴールを外れたりゴールポストやクロスバーから跳ね返った場合、ゴールキーパーの飛び出しが明らかにキッカーに影響を与えていない限り、キックは再び行われない。
  - （試合中、または KFPM において）ゴールキーパーが飛び出して、キックを再び行うことになった場合、最初の飛び出しには注意が与えられ、以降再び反則を犯せば警告される。
  - 試合中に選手に示された警告は、KFPM に繰り越されない。試合中、KFPM の両方で警告となった場合、2 つの警告が示されたと記録されるが、退場にはならない。
  - ゴールキーパーとキッカーがまったく同時に反則を犯した場合、キッカーが罰せられる。
- ビデオアシスタトレフェリー（VAR）
  - 「VAR オンリーレビュー」には、TV シグナルを１度だけ示す。
  - レビューする事象の判断が主観に委ねられるものであったならば、主審は「オンフィールドレビュー（OFR）」することが求められる。これにより、主審は、レフェリーレビューエリアでビデオのリプレーを見ることになる。

その他の重要な明確化

年次総会において、競技規則に関する次の明確化が承認された。

- ゴールポストとクロスバーは、4 つの基本的な形状を組み合わせたものでもよい。
- 守備側競技者が意図的にハンドの反則を犯した場合、オフサイドを判定するうえでは、「意図的なプレー」となる。
- プレーの再開後、ゴールキーパーが「不正に」ボールを 2 度触りした場合（例えば、他の競技に触れられる前に触れる）、手や腕で触れたとしても、それに応じた懲戒の罰則が適用される。
- 相手の大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止する反則があって、主審が「すばやい」フリーキックを認めたり、アドバンテージを適用した場合、警告とはならない。
- ドロップボールが行われるときに規定の 4m 以上離れない競技者には、警告される。
- ゴールキックやフリーキックのとき、ゴールキーパーがボールを「フリック（足で持ち上げ）」し、その後、チームメイトがゴールキーパーにボールをキャッチさせるため、頭や胸で戻した場合、ゴールキックは再び行われるが、繰り返し行われない限り、懲戒の罰則は与えられない。

年次総会では、オフサイドの基本的な原理原則が得点することや、攻撃的なサッカーを促進するという強い願いによって支持されていることが同意された。さらに、そのためには**「第 11 条—オフサイド」**は、この原理原則を反映し、改正提案することを見据えて、分析され、見直されるべきであるとも同意された。

3. 脳震盪

脳震盪は重要かつ複雑な問題であるが、IFAB は試合中に起こったことについて責任を持つという観点から議論を行った。脳震盪の専門家グループからの報告が行われ、引き続き検討を行うことや、数週間中には対応策の試行手順を策定することが合意された。手順は、頭の負傷が実際に起きたとき、また、負傷したと考えられるときの対応方法についてのものになる。

4. 'play fair!':競技のフィールド上で行動

競技規則がサッカーの試合中の争いを減らすことに役立たせられるのか、来年に向け、その方法について焦点を当てて検討することとした。

5. ビデオアシスタントレフェリー（VAR）

FIFA や大陸連盟の主催大会や世界中約 40 か国において VAR が成功裏に導入されたと報告されたが、各国協会や競技会において VAR の使用や使用計画が顕著に増加していることは喜ばしいことである。幾つかの注目を浴びている競技会において、競技規則が定めている VAR の手順の適用に一貫性が見られないことを認識しているが、最近の打ち合わせの中において、これらの競技会の主催者は来シーズンから世界に合わせた適用へと修正する意向を示している。

また、財源確保が困難な各国協会や競技会がより容易に VAR を使用できるようなシステムを開発するために、FIFA が重要な役割を担っている様々な技術革新についての説明が行われた。

更には、例えばレビューを行っているときの審判団の会話にアクセスするなど、判定を行うプロセスをより見える化することは現時点では適当ではないものの、レビューのプロセスや主審の最終判定の理解を促進するために現行のコミュニケーション方法を向上させる努力を行うべきであるとした。

6. コミュニケーションと教育

特にメディアチャンネルや競技規則の携帯アプリなどのデジタル機器を通じてなど、引き続きサッカーのステークホルダーが競技規則の理解を推進する手順についての説明があった。

競技規則携帯アプリ

ご案内のとおり、昨年 IFAB は競技規則携帯アプリを立ち上げ、新しく、容易にアクセスでき、環境にも優しい方法で競技規則を紹介している。また、アプリでは、（詳細な説明も加え）ハイライトで強調した直近の変更を付した最新版の全競技規則と共にVARの手順、用語集や審判団へのガイドラインも見ることができる。アプリは、プロフェッショナルからアマチュア、またサッカーファン、メディアの方々などサッカーや競技規則に興味を抱いている誰にでも役立つものとなっている（より詳しい情報は、www.theifab.com/logapp/で見ることができる)。

アプリは、英語、フランス語、ドイツ語およびスペイン語での利用が可能だが、その他の言語も含めて欲しいとの要望も多いことから、より多くの言語での利用を可能としたアプリも用意している（より詳しい情報については、logapp@theifab.com にコンタクトしていただきたい)。

IFAB は、サッカー界のすべてのエリアからのサポートや多くの提案を歓迎する。それによって競技規則が進化し、サッカーがグラスルーツから国際レベルまで、より公平・公正で、より身近で、また、より楽しめるようになる。

また、引き続き、世界中からのご意見をいただくようにしていきたい。それによって、競技規則が競技のフィールドにおける公平・公正さやインテグリティー（高潔性、健全性）を促進し保証し続けることになる。

以上

国際サッカー評議会
事務局長　ルーカス・ブラッド

JFA

日サ協発第 200060 号
2020 年 5 月 14 日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会（以下、IFAB）から 2020 年 5 月 8 日付回状第 19 号をもって「2019/20 および 2020/21 競技規則－第 3 条への暫定的改正」について通達がありました。通達自体の日本語訳は、下記のとおりです。
今回の通達は、世界中における新型コロナウイルスの感染拡大により、各国のサッカー競技会が中断、また開幕できない状況を余儀なくされている中、競技会の開幕および再開後、限られた期間で試合に臨むことになる選手の安全および適切な環境を確保するために、2020 年内に終了予定の競技会における交代の最大数について暫定的に改正したものであり、競技会主催者の判断によって適用することができます。

本通達について、各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるようお願いいたします。

記

第 3 条への暫定的改正について

COVID-19 のパンデミックは、スポ―ツを含め世界中で日常生活に広範囲にわたる影響を及ぼした。多くの国がこの状況から抜け出し始め、ウイルスの影響を被ったサッカー競技会の再開に対して、徐々に焦点が向けられてきている。競技会が再開されるとき、試合は（例えば、次のシーズンへの影響を小さくするため）、期間を凝縮して、また、異なる気象の状況下で行われることもあり、これらは、選手の快適な環境確保に影響を及ぼすことになり得る。

これにより、国際サッカー評議会（IFAB）は、既に開始されているいないにかかわらず、**2020 年内に終了予定**の競技会における交代の最大数に関する**競技規則第 3 条―競技者への暫定的改正導入**（詳細については、3ページを参照）に対する FIFA の要望を承認した。

この暫定改正を適用するかどうかについては、競技会の主催者の判断に委ねられる。IFAB と FIFA は、例えば、2021 年に完了することになる競技会について、延長して適用する必要があるかどうか、今後決定する。

第 3 条―競技者　－　暫定的改正

競技規則の文章は、この回状の3ページに示してあるが、概略は次のとおり。

公益財団法人 日本サッカー協会
〒113-8311 東京都文京区サッカー通り（本郷 3-10-15）JFA ハウス
Tel.050-2018-1990 Fax.03-3830-2005
www.jfa.jp

- 各チームは最大 5 人の交代要員を用いることができる。
- 試合が途切れる回数を減らすため、試合中の交代は各チーム最大 3 回とする。加えて、ハーフタイム時にも交代することができる。
- 両チームが同時に交代した場合は、各チームそれぞれ 3 回のうちの 1 回の交代回数を使ったとして数える。
- 試合中に使わなかった交代、また、残りの交代回数は延長戦に繰り越す。
- 競技会規定で、延長戦にさらに1人の交代要員の追加を認めているのであれば、各チームはもう 1 回の交代を行うことができる。加えて、交代は延長戦の始まる前、また延長戦のハーフタイムにおいても可能である。

（注）再交代の使用は、（現在、最大 3 人の交代が認められている）上位の競技会において用いることはない。

IFAB はこの機会に、大会主催者が、第 7 条に規定する飲水タイムやクーリングブレークなど、競技規則にある選手やその他の試合の参加者の快適な環境確保や安全に関する対応策について目を向けていただきたいと考える。

ビデオアシスタントレフェリー（VAR）が導入されている競技会は、競技会再開時に主催者の判断において、使用を中止することが認められる。しかしながら、VAR が使用されるならば、競技規則のすべての観点、更には、VAR の手順が、そのまま適用されることになる。なお、競技会は IFAB の承認なく、第 3 条の暫定的改正の適用、また、現在使用可能な対応を行うことができる。

コロナウイルス（COVID-19）と 2020/21 競技規則

2020/21 競技規則は、競技会（および競技会以外の試合）において、2020 年 6 月 1 日に施行されることになるが、COVID-19 によって中断されている競技会については、再開が 2020 年 6 月 1 日以降であっても、2019/20 競技規則を用いるのか 2020/21 競技規則で競技会を終了させるのか選択することができる。競技会再開に備えて行う「親善、準備、または練習」試合については、競技会が再開するときに適用される競技規則を用いるべきである。

国際サッカー評議会
専務総長　ルーカス・ブラッド

第 3 条—競技者:交代の数

現在の文章:

2. 交代の数
公式競技会
交代要員の数は、公式競技会のいかなる試合でも最大で 5 人までとし、その数は FIFA、大陸連盟、または、各国サッカー協会が決定する。ただし、トップディビジョンにおけるクラブのトップチーム、あるいは各国の「A」代表チームが出場する男子および女子の競技会では、交代は最大で 3 人までとする。

暫定的な改正:

競技会の主催者は、次のいずれか、または、両方を適用することができる:

- *試合中、各チームは:*
  - *最大 5 人の交代要員を用いることができる。*
  - *最大 3 回の交代を行うことができる。(*)*
  - *加えて、ハーフタイムにも交代を行うことができる。*

- *延長戦が行われるとき、各チームは:*
  - *加えて、さらに 1 人の交代要員を用いることができる(各チーム、既に最大数の交代要員を用いている、いないにかかわらず)。*
  - *加えて、さらに 1 回の交代を行うことができる(既に最大の交代回数を用いている、いないかかわらず)。(*)*
  - *加えて、次の交代を行うことができる。*
    - *延長戦が始まる前*
    - *延長戦のハーフタイム*

チームが最大の交代要員、交代の回数を用いていないのであれば、試合中に用いなかった交代要員、また、交代回数は延長戦に繰り越すことができる。

(*) 両チーム同時に交代を行ったならば、各チーム 1 回の交代の回数を用いたとして数えることになる。

JFA

日サ協発第 200057 号
2020 年 5 月 14 日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会（以下、IFAB）から 2020 年 4 月 7 日付回状第 18 号をもって 2020/21 年の競技規則改正を含む、IFAB 第 134 回年次総会における決定について通達されました。

通達自体の日本語訳（概略）は、下記のとおりです。昨年（2019/20）の改正では競技に直結する規則の改正が数多くありましたが、本年の改正はこの数年の改正の中では最も少なくなっています。しかしながら、これまでどおり、サッカー競技にかかわる関係者、特に競技者、監督/コーチそして審判員はこれらの改正を十分に理解した上で、プレー、指導、そしてレフェリングに携わっていただきたく、お願い申し上げます。

IFAB からの回状に添付されている「2020/21 年競技規則ー変更と明確化」は、必要に応じ「日本協会の解説」を加えたものを本通達に添付しています。各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるよう、併せてお願い申し上げます。

これらの改正等は国際的には原則 2020 年 6 月 1 日から有効となります。例年日本サッカー協会では、この通達とともに各種競技会における競技規則改正の適用開始日を通知していましたが、昨今の新型コロナウィルス感染拡大に伴い、各種競技会および試合が延期・中止となっている状況であるため、適用開始日については、日程が確定した時点でお知らせいたします。

なお、今回の競技規則の改正についての説明用映像を本協会のホームページに 6 月初旬までに掲載する予定です。

記

国際サッカー評議会（IFAB）第 134 回年次総会について（決定）

IFAB の第 134 回年次総会は 2020 年 2 月 29 日に北アイルランドのベルファストにおいて、デイビッド・マーチン アイルランドサッカー協会会長が議長となり、開催された。年次総会における主たる決定および議論の概要は、次のとおり。

1. 2019/20 競技規則

昨年（2019/21）の競技規則改正は、満足のいくものであったと評価された。特に、ゴールキック、交代の進め方、チーム役員へのレッドカードやイエローカードの提示、攻撃側競技者が守備のための壁に入ることが出来なくなったことは、すべてのレベルの試合において好影響を与えた。

2. 2020/21 競技規則

公益財団法人 日本サッカー協会

〒113-8311 東京都文京区サッカー通り（本郷 3-10-15）JFA ハウス
Tel.050-2018-1990 Fax.03-3830-2005
www.jfa.jp

いくつかの競技規則改正が承認されたが、文章そのものは、前述のとおり、添付の「2020/21 年競技規則—変更と明確化」で示されている。

なお、6 月 1 日以降、変更点のすべてが競技会および試合において施行されなければならないが、この日以前に開始されている競技会については、事前に施行することも次の競技会が始まるまで遅らせることもできる。

コロナウィルス（COVID-19）と競技規則

CODIV-19 によって中断されている競技会については、競技会の最後の試合まで 2019/20 競技規則を用いるのか 2020/21 競技規則を採用するのか選択することができる。

＊ 親善試合、練習試合あるいは競技会再開準備のための試合については、競技会再開が 2020 年 6 月以降であっても、その時に適用されることになっていた競技規則を用いることが可能である。

主な変更

年次総会で承認された競技規則の主な変更や明確化

- ハンドの反則：
  - 偶発的にボールが攻撃側競技者の腕や手に当たった場合、当たった「直後」に得点、また、その競技者やチームが決定的な得点をする機会を得た場合のみ罰せられることになる（例えば、ボールが手や腕に当たった後、ボールがほんの短い距離しか移動しなかったり、数少ないパスしか行われなかった場合など）。
  - ハンドの反則になるかどうかの判断をするために、「腕」は脇の下の一番奥の場所の位置までと定義することとした。
- ペナルティーキックおよびペナルティーマークからのキック（KFPM）
  - ボールがけられる前にゴールキーパーが飛び出したが、ボールがゴールを外れたりゴールポストやクロスバーから跳ね返った場合、ゴールキーパーの飛び出しが明らかにキッカーに影響を与えていない限り、キックは再び行われない。
  - （試合中、または KFPM において）ゴールキーパーが飛び出して、キックを再び行うことになった場合、最初の飛び出しには注意が与えられ、以降再び反則を犯せば警告される。
  - 試合中に選手に示された警告は、KFPM に繰り越されない。試合中、KFPM の両方で警告となった場合、2 つの警告が示されたと記録されるが、退場にはならない。
  - ゴールキーパーとキッカーがまったく同時に反則を犯した場合、キッカーが罰せられる。
- ビデオアシスタトレフェリー（VAR）
  - 「VAR オンリーレビュー」には、TV シグナルを１度だけ示す。
  - レビューする事象の判断が主観に委ねられるものであったならば、主審は「オンフィールドレビュー（OFR）」することが求められる。これにより、主審は、レフェリーレビューエリアでビデオのリプレーを見ることになる。

その他の重要な明確化

年次総会において、競技規則に関する次の明確化が承認された。

- ゴールポストとクロスバーは、4 つの基本的な形状を組み合わせたものでもよい。
- 守備側競技者が意図的にハンドの反則を犯した場合、オフサイドを判定するうえでは、「意図的なプレー」となる。
- プレーの再開後、ゴールキーパーが「不正に」ボールを 2 度触りした場合（例えば、他の競技に触れられる前に触れる）、手や腕で触れたとしても、それに応じた懲戒の罰則が適用される。
- 相手の大きなチャンスとなる攻撃を妨害、または阻止する反則があって、主審が「すばやい」フリーキックを認めたり、アドバンテージを適用した場合、警告とはならない。
- ドロップボールが行われるときに規定の 4m 以上離れない競技者には、警告される。
- ゴールキックやフリーキックのとき、ゴールキーパーがボールを「フリック（足で持ち上げ）」し、その後、チームメイトがゴールキーパーにボールをキャッチさせるため、頭や胸で戻した場合、ゴールキックは再び行われるが、繰り返し行われない限り、懲戒の罰則は与えられない。

年次総会では、オフサイドの基本的な原理原則が得点することや、攻撃的なサッカーを促進するという強い願いによって支持されていることが同意された。さらに、そのためには**「第 11 条—オフサイド」**は、この原理原則を反映し、改正提案することを見据えて、分析され、見直されるべきであるとも同意された。

3. 脳震盪

脳震盪は重要かつ複雑な問題であるが、IFAB は試合中に起こったことについて責任を持つという観点から議論を行った。脳震盪の専門家グループからの報告が行われ、引き続き検討を行うことや、数週間中には対応策の試行手順を策定することが合意された。手順は、頭の負傷が実際に起きたとき、また、負傷したと考えられるときの対応方法についてのものになる。

4. 'play fair!':競技のフィールド上で行動

競技規則がサッカーの試合中の争いを減らすことに役立たせられるのか、来年に向け、その方法について焦点を当てて検討することとした。

5. ビデオアシスタントレフェリー（VAR）

FIFA や大陸連盟の主催大会や世界中約 40 か国において VAR が成功裏に導入されたと報告されたが、各国協会や競技会において VAR の使用や使用計画が顕著に増加していることは喜ばしいことである。幾つかの注目を浴びている競技会において、競技規則が定めている VAR の手順の適用に一貫性が見られないことを認識しているが、最近の打ち合わせの中において、これらの競技会の主催者は来シーズンから世界に合わせた適用へと修正する意向を示している。

また、財源確保が困難な各国協会や競技会がより容易に VAR を使用できるようなシステムを開発するために、FIFA が重要な役割を担っている様々な技術革新についての説明が行われた。

更には、例えばレビューを行っているときの審判団の会話にアクセスするなど、判定を行うプロセスをより見える化することは現時点では適当ではないものの、レビューのプロセスや主審の最終判定の理解を促進するために現行のコミュニケーション方法を向上させる努力を行うべきであるとした。

6. コミュニケーションと教育

特にメディアチャンネルや競技規則の携帯アプリなどのデジタル機器を通じてなど、引き続きサッカーのステークホルダーが競技規則の理解を推進する手順についての説明があった。

競技規則携帯アプリ

ご案内のとおり、昨年 IFAB は競技規則携帯アプリを立ち上げ、新しく、容易にアクセスでき、環境にも優しい方法で競技規則を紹介している。また、アプリでは、（詳細な説明も加え）ハイライトで強調した直近の変更を付した最新版の全競技規則と共にVARの手順、用語集や審判団へのガイドラインも見ることができる。アプリは、プロフェッショナルからアマチュア、またサッカーファン、メディアの方々などサッカーや競技規則に興味を抱いている誰にでも役立つものとなっている（より詳しい情報は、www.theifab.com/logapp/で見ることができる)。

アプリは、英語、フランス語、ドイツ語およびスペイン語での利用が可能だが、その他の言語も含めて欲しいとの要望も多いことから、より多くの言語での利用を可能としたアプリも用意している（より詳しい情報については、logapp@theifab.com にコンタクトしていただきたい)。

IFAB は、サッカー界のすべてのエリアからのサポートや多くの提案を歓迎する。それによって競技規則が進化し、サッカーがグラスルーツから国際レベルまで、より公平・公正で、より身近で、また、より楽しめるようになる。

また、引き続き、世界中からのご意見をいただくようにしていきたい。それによって、競技規則が競技のフィールドにおける公平・公正さやインテグリティー（高潔性、健全性）を促進し保証し続けることになる。

以上

国際サッカー評議会
事務局長　ルーカス・ブラッド

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA140867651903 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい

2020/21サッカー競技規則改正－試合結果の決定（第10条）

-試合終了後からペナルティーマークからのキック（KFPM）終了までの警告の扱いについての解釈

-審判報告書の時間表記

Japan Football Association

JFA審判委員会

2020年7月14日

JFA

JFA DREAM 夢があるから強くなる

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA140867651903 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい

試合終了後からペナルティーマークからのキック（KFPM）終了までの警告の扱いについての解釈

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA1408676519O3 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい。

【変更】

- 試合後にペナルティーマークからのキックが行われるときも、他に規定されていない限り、競技規則の関係諸条項が適用される。試合中に退場を命じられた競技者のキックへの参加は認められないが、試合中に示された注意や警告はペナルティーマークからのキックに繰り越されない。

【解説】

- ペナルティーマークからのキック（KFPM）は**「試合の一部ではない」**ので、（延長戦を含む）試合中に示された警告や注意はKFPMに繰り越されない。

- 同じ競技者が、**「試合中」**および**「KFPM」**に**それぞれ1度ずつ警告**を受けたとしても、「同じ試合の中で2つ目の警告」ではないため「退場」とはならない。よって、「退場」という理由で、次の試合の自動的な出場停止とはならない。
  - ✓ 競技会で導入されている「警告の累積」については規律委員会で決定

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA1408676519O3 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい。

試合（延長戦含む）終了のホイッスル後、どの時点がKFPMの始まりと考えるか、即ち、試合中に示された警告がどの時点をもって持ち越されないと判断されるのか？

- 試合(延長戦含む）終了のホイッスル後、両チームの選手が自分の**ベンチ前に戻り終えた時（競技のフィールド内）を試合終了の目安**とする。
- 選手およびチーム役員が「落ち着いている」ことを前提とし、選手が「戻り終えたか否か」については、主審が判断する。
  - ✓ *即ち、主審が「戻り終えた」と判断した後、選手が警告となるような行為をした場合は、KFPM中の警告として扱われる。*
- 「主審は、試合前の競技のフィールド点検のために競技のフィールドに入ったときから試合（ペナルティーマークからのキックを含む）終了後に競技のフィールドを離れるまで、**懲戒処置を行使する権限をもつ。**」と第5条に示されている。よって、KFPM終了後、主審がフィールドを離れる前に示された警告は、KFPMの間に示されたものとして考える。

※利用者：丸山 喜美彦
FAID：JPA140867651903 / Downloaded：2020/02/18
本コンテンツはライセンス契約に従って利用されます。

No	試合前・前半・HT・後半 延長前・延長前半・延長後半前・延長後半	KFPM前 インターバル	KFPM	KFPM後	結果	カード提示	YC		累積警告
1	警告1 / 警告2					YC+(YC+RC)	2		0
2	警告1	警告2 *①				YC+(YC+RC)	2		0
3	警告1		警告(1)		警告・(警告)	YC+YC	2	0	2
4	警告1			警告(1) *ﾌｨｰﾙﾄﾞを去る前	警告・(警告)	YC+YC	2	0	2
5		警告1 *①	警告(1)		警告・(警告)	YC+YC	2	0	2
6		警告(1) *②	警告(2)			YC+(YC+RC)	2		0
7		警告1 *①		警告(1) *ﾌｨｰﾙﾄﾞを去る前	警告・(警告)	YC+YC	2	0	2
8		警告(1) *②		警告(2) *ﾌｨｰﾙﾄﾞを去る前		YC+(YC+RC)	2		0
9			警告(1) / 警告(2)			YC+(YC+RC)	2		0
10			警告(1)	警告(2) *ﾌｨｰﾙﾄﾞを去る前		YC+(YC+RC)	2		0
11	警告1		警告(1)	警告(2) *ﾌｨｰﾙﾄﾞを去る前		YC+YC+(YC+RC)	3		1

【警告の表記について】
※ 試合中の警告　警告1 or 警告2
※ KFPMの警告　警告（1）or 警告（2）
(KFPM:試合終了後、選手がベンチ前に戻り終えた後)

＊① 試合終了後、選手がベンチ前に戻り終える前
⇒警告が示された場合、この警告は試合中に示されたものと考える。

＊② 試合終了後、選手がベンチ前に戻り終え、主審が選手・チーム役員ともに落ち着いたことを確認した後
⇒警告が示された場合、この警告はKFPM中に示されたものと考える。

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA140867651903 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい

審判報告書の時間表記

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA1408676519O3 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい。

警告

1. 時間　　＊「試合イベント時間表記統一について」参照
   - 試合中：前、後半の通算時間また延長も通算時間を記入する。
   - ペナルティーマークからのキック：「PK」と記入する。
2. チーム名
3. 選手の番号、チーム役員の場合は、役職
4. 氏名（フルネームで記入すること）
5. 理由（競技規則の記載どおりに記入する。ただし、「ラフプレー」は、競技規則では「反スポーツ的行為」に含まれるが、日本では独立した警告の項目としている。適用を間違えないよう、注意する）
6. 具体的な反則の内容

ご利用者：丸山 喜美彦
JFAID：JFA1408676519O3 / Downloaded：2020/07/18
「JFAライセンス契約」に従ってご利用下さい

[redacted]	[redacted]
試合開始前	KO前
試合中（延長戦含む）	＊試合時間
ハーフタイム	HT
延長戦開始前	延KO前
延長戦ハーフタイム	延HT
試合終了の笛から、競技者がベンチ前に戻り終える前まで	終了後
ペナルティーマークからのキック（KFPM） * 競技者がベンチ前に戻り終え、主審が競技者・チーム役員ともに落ち着いたことを確認した後から、KFPMが終了し主審がフィールドを離れるまで	PK